

# 民族生物学的の文芸研究から作品内在解釈へ 1940年代のトラークル理解における転換と連続性

日 名 淳 裕

## 1. オストマルクの郷土詩人

ヨーゼフ・ナードラー（Josef Nadler 1884-1963）がナチス・ドイツの文化政策にしたがって編纂した『ドイツ民族の文学史（Literaturgeschichte des Deutschen Volkes）』（1938-1941）には、ゲオルク・トラークル（Georg Trakl 1887-1914）について以下のような記述がある。

皇帝国家から帝国のオストマルクへの移行期におけるチロルとザルツブルクは一人の悲劇的な詩人の姿をとって現れた。その者の人生はどちらの土地にも属するが、その魂はどちらにも属さない、ゲオルク・トラークル…<sup>1</sup>

比較的多くのスペースが割かれた記述から、第三帝国期にトラークルが「郷土詩人（Heimatdichter）」という解釈を与えられることで文学史的に延命した様子が読み取れる。これが解釈であるといえるのは、今では、トラークルが二つの都市に対して必ずしも肯定的な感情を抱いていなかったことがよく知られているからだ。<sup>2</sup>むしろ否定的な感情が勝ったからこそ、トラークルは他の同時代人たちと同じく、第一次世界大戦に出征し、東部戦線の異郷で最期を迎えることとなった。ナードラーはトラークルの死をめぐる矛盾を「エロスが力を行使したとすれば、そのようにエロスにタナトスが力を行使した」と述べている。<sup>3</sup>この文章が、ナチスの焚書リストに載ったフロイトの概念に依拠しているように、そもそもトラークルを第三帝国の理念形のみによって捉えようとするこ

には限界がある。詩人としての活動の短さ、残された作品の少なさに反比例して、トラークルは実に多面的であり、分裂的でさえある。この詩人の文学史的な位置づけが問題となってきた理由はここにある。

ヒトラーが政権を掌握した1933年以降のドイツ文学において「民族 (Volk)」という概念が最重要視された一方で、「人種 (Rasse)」という概念はそれほど意識されなかったという。<sup>4</sup> それでもトラークルが第三帝国の文学史観に組み込まれる様子には違和感を覚えざるをえない。ナードラーは記述の最後に「近いと同時に相反している」詩人としてヘルダーリンに言及している。この書籍が刊行された二年後にウィーン大学でナードラーの同僚となったハインツ・キンダーマン (Heinz Kindermann 1894-1985) は文学研究の政治化を唱え、その際にヘルダーリンを「民族の予見者、告知者 (Seher und Kunder seines Volkes)」<sup>5</sup> として持ち上げた。まさにこの時期からトラークルはヘルダーリンとの親近性において読まれてゆく。<sup>6</sup> キンダーマンが「民族生物学的文芸研究 (volksbiologische Erforschung des Schrifttums)」<sup>7</sup> を推し進めた背景には、彼が赴任していた西プロイセンの自由都市ダンツィヒのように旧ドイツ帝国領であった都市が直面した民族的同一性の危機があった。この時期にトラークルが注目されたのは彼が生まれた街であるザルツブルクがドイツとの国境に位置することと無縁でないだろう。ヘルダーリンとトラークルの間に精神的、民族的連続性を確認することは文芸における「合邦 (Anschluss)」として企図されたことは疑いえない。

第三帝国期におけるトラークルの評価は政治的要請が先行したものであった。ナードラーは彼の作風を説明するにあたり、「トラークルはあらゆるドイツの文芸において最も魅了された死の愛好家であった」と述べ、「死と死ぬこと (Tod und Sterben)」を前面に出す。この「死」は第一次世界大戦の敗北によるハプスブルク帝国の死を個人のレベルで反復したものとされ、トラークルは民族の運命を詩人として引き受けた受難者とされる。トラークル自身の死については「倒れた (zusammengebrochen)」と曖昧に表現され、戦場の悲惨に耐えきれず錯

乱し、軍法会議にかけられるのを恐れながら命を絶った史実は完全に無視されている。

詩人が生前からその作品を発表してきたルートヴィヒ・フォン・フィッカー (Ludwig von Ficker 1880-1967) の雑誌『ブレンナー (Der Brenner)』は、1934年以降刊行を停止していたが、1940年に帝国文学院によって有害文書リストに載せられた。その理由の一つは『ブレンナー』がオーストロファシストのエンゲルベルト・ドルフェース (Engelbert Dollfuß 1892-1934) を支持していたためだと思われる。『ブレンナー』が再刊され、フィッカーらが活動を再開するのは1946年であり、トラークルが第三帝国の御用学者たちによって読み替えられてゆく過程においてフィッカーには自らの見解を述べる力がなかった。<sup>8</sup>

## 2. 戦後ウィーンの雑誌文化

1945年4月13日にソ連軍によって陥落して以後、ウィーンは連合四カ国の共同統治下に置かれた。そこでは娯楽に飢えた市民に対して、占領軍それぞれのプロパガンダを反映しつつ、実に多様な雑誌が発刊された。それが今日のオーストリア文学の礎を築いたといわれる。<sup>9</sup> 雑誌の発行許可と紙の配給は連合国の判断に拠ったため、ナチス・ドイツの文化政策に迎合した組織や個人は排除され、戦時中に執筆禁止処分を受けていた作家たちが活動を再開した。彼らの多くは第一次世界大戦中に青春を送った世代であり、文学史的には表現主義から多様な前衛芸術運動への展開に参加し、やがて「退廃芸術 (Entartete Kunst)」として徹底的に弾圧された者たちであった。

表現主義は様々なイデオロギーを信奉した芸術家の「地平線的な (horizontal)」集合を志すものであった。<sup>10</sup> 「地平線的な」あるいは「同時的な」という形容詞は表現主義によって固有の使用を見たもので、一個の作品を成り立たせる詩学から運動全体の指標までを束ねる概念へと発展した。これらはピントゥスが『人類の黄昏』に寄せた言葉である

が、同じようなことがオーストリアにも当てはまる。1930年、ハプスブルク帝国が崩壊した第一共和政期に編集された『オーストリアの青年の抒情詩アンソロジー (Anthologie junger Lyrik aus Österreich)』は、疑いなく「地平線的」、「同時的」という概念に基づいている。<sup>11</sup> ここにはオットー・バジル (Otto Basil 1901-1983)、ルドルフ・ヘンツ (Rudolf Henz 1897-1987)、テオドーア・クラマー (Theodor Kramer 1897-1958)、ヨーゼフ・ヴァインヘーバー (Josef Weinheber 1892-1945) といった様々な思想を持った詩人たちが寄稿した。ピントゥスと異なるのは、フリードリヒ・ザッハー (Friedrich Sacher 1899-1982) が編集した当該本は「アンソロジー」であり、また「地平線的」、「同時的」ではあるが、はっきりと「祖国オーストリア」という「垂直的」、「有因的」基軸を中心に据えたことである。オーストリア文学の固有性は、失われた「祖国」を絶対的な有因とする点にあり、これは戦後オーストリア文学にも強固に受け継がれてゆく。<sup>12</sup>

ここから戦後ウィーンで刊行された文芸誌には、オーストリア文学の同一性を保証する過去の作家とその解釈に多くの紙面が割かれた。すでに述べたように、各雑誌がそれぞれ何らかの政党、宗教団体、個人を後ろ盾としていたため、その傾向は実に多様であったが、グリルパルツァーは主義主張を超えて広く参照されている。<sup>13</sup> トラークルの作品はオーストリア文化連合主催の『トゥルム (Der Turm)』<sup>14</sup>、オーストリア共産党のヴィクトール・マテイカ (Viktor Matejka 1901-1993) と親交のあった L. W. ロホヴァンスキー (L. W. Rochowanski 1885-1961) の『アガトン年鑑』<sup>15</sup>、ベンノ・フライシュマン (Benno Fleischmann 1906-1948) の劇場雑誌『喜劇 (Komödie)』<sup>16</sup>、ザルツブルクのエルンスト・シェーンヴィーゼ (Ernst Schönwiese 1905-1991) による『シルバーボート (das silberboot)』<sup>17</sup> など幅広い媒体に掲載された。興味深いのは、ブレンナー・グループと交友関係があり、後にトラークルの伝記を執筆するバジルの『プラン (Plan)』にはトラークルの詩そのものは一度も掲載されなかったことである。しかし、それは雑誌の趣旨にトラークルの作品

が合致しなかったためではなく、『プラン』の方法論によるといえよう。

同様のことが『ジルバーボート』を例として指摘できる。戦後オーストリア文学が自らを新しい文学史の中に位相する過程においては、ただどの作家に連続性を見出すかのみならず、ある作家のどのような側面に強く依拠するかが模索された。それゆえこの時期には、従来、公にされてこなかった遺稿が数多く発表されることとなった。1947年第1号の『ジルバーボート』にはトラークルの戯曲断片「ドン・ファンの死 (Don Juans Tod)」からの抜粋が掲載されたが、こうした傾向はなにもトラークルに限ったものではない。

文学史において「詩人」として認知されていたトラークルの戯曲の出版に力を入れたのは、1949年に刊行されたトラークルのザルツブルク版全集の一卷『遺稿と伝記 (Nachlass und Biographie)』<sup>18</sup>の編者ヴォルフガング・シュネディッツ (Wolfgang Schneditz 1910-1964) である。シュネディッツは、多くの遺稿を参照することで、トラークルを劇作家として再定義しようと試みた。それが、『喜劇』に掲載された「劇作家としてのゲオルク・トラークル (Georg Trakl als Dramatiker)」<sup>19</sup>という野心的な論文である。シュネディッツの挑戦は、キリスト教的価値観に合わない「青髭 (Balubart)」と「ドン・ファンの死」を全集に収録するに至り、これがフィッカーの感情をひどく害することとなった。<sup>20</sup> オーストリア政府の助成を受けて刊行された1954年の『ブレンナー』最終号で彼は、シュネディッツに対する公開書簡「ゲオルク・トラークルの遺産」を掲載し、ザルツブルク版の動機を批判している。

心より尊敬する氏よ！あなたと親しくなろうという気は私にはありませんでした。といいますのも、あなたがゲオルク・トラークルの作品と遺稿を扱うやり方、彼について知られており、また加えて知られえたとところのものすべてを、賛否両論あるでしょうが、ジャーナリストの忙しい仕事の対象とする方法、それは私ができれば距離を置きた

いところのものなのです。<sup>21</sup>

フィッカーが認めることのできないシュネディッツの編集方法とは、ザルツブルク時代のトラークルの作品—「青髭」と「ドン・ファンの死」はここに含まれる—の解釈であり、フィッカーの考えでは、当時はやった新ロマン主義の影響を受けた精神の「疾風怒濤」は、後のインスブルック時代の「宗教的敬虔 (Pietät)」に帰納して理解されねばならない。この主張を中心としてフィッカーは、シュネディッツが「トラークルがどのように死んだのか」を詮索し<sup>22</sup>、フィッカーが編んだ『トラークルの思い出 (Erinnerung an Georg Trakl)』を出し抜いて『遺稿と伝記』を出版し<sup>23</sup>、不遜にも「最初の (»erste«)」全集という序数を用いたことなどを次々と非難している。<sup>24</sup> なおこの争い自体はフィッカーの勝利に終わり、今日シュネディッツの名は忘れられ、彼が再評価を試みたトラークルの戯曲はふたたび詩作品の傍らに追いやられた。

フィッカーの超人的な努力に加えて、マルティン・ハイデガー (Martin Heidegger 1889-1976) が講演で取り上げたこともあり<sup>25</sup>、トラークルは1950年代に最も読まれた詩人の一人となった。それでも読まれ方には依然として顕著な差が見られる。『プラーン』はトラークルの作品そのものを掲載するのではなく、その「生産的受容 (produktive Rezeption)」を試みた。

### 3. 『プラーン』のトラークル

オットー・バジルが1945年に再刊した『プラーン』は、戦後オーストリアで刊行された雑誌と比較して、多くの若者に発表の機会を与えた点に特徴がある。<sup>26</sup> 1945年11月から一年間連載された「オーストリア抒情詩選 (Kleine österreichische Anthologie)」には今日無名の詩人たちに混ざって、エーリヒ・フリート (Erich Fried 1921-1988) やフリーデリーケ・マイレッカー (Friederike Mayröcker 1924-) の作品が掲載されてい

る。<sup>27</sup>「詩選」以外でもイルゼ・アイヒンガー (Ilse Aichinger 1921-2016) の詩的散文「不信への呼びかけ (Aufruf zum Misstrauen)」やパウル・ツェラン (Paul Celan 1920-1970) の「骨壺の中からの砂 (Der Sand aus den Urnen)」の抄訳も掲載されており<sup>28</sup>、「1945年以後のオーストリア文学の諸々の契機はオットー・バジルの名とともに分かちがたく結びついている」<sup>29</sup>という文学史的評価は正しい。<sup>30</sup>

今日ドイツ語文学史に必ず登場する彼らは、バジルが組織を試みた「若者 (Jugend)」全体のほんの一部にすぎない。1946年7月の『プラーン』には表紙に「若者の声 (Stimme der Jugend)」と記され、この号自体が戦後世代に捧げられている。

この冊子のもっぱら若い人たちによって書かれており作られている。最も若い執筆者は16歳であり、年限を25歳に定めていたのだ。われわれの若者たちを動かすものすべてを彼らはここで発言することができたし、それを心と怒りをもって言ったのだ!<sup>31</sup>

巻頭の言葉をバジルはこのように始めている。執筆者は16歳から25歳まで、すなわち1921年から1930年までの十年間に生まれた者に限定された。バジルは序言の中でこの世代に対して「われわれ年長 (wir Älteren)」を対置させている。「1918年から1939年の怠惰で平和な年月」に成長した旧世代には「心と怒り」をもって発言することができない。それゆえ新世代に発言の場を譲るというシナリオである。

「若者の声」の企画の一つとして「ゲオルク・トラークルの後継者たち (Georg Trakls Nachfolge)」と題された詩選が収録された。これは1946年にフランスの助成を受けて12年ぶりに刊行された第16号『ブレンナー (Der Brenner)』を意識したと推測され<sup>32</sup>、はじまりに「ゲオルク・トラークルへの信仰告白 (Bekanntnis zu Georg Trakl)」という一種の綱領が掲げられている。

我々は最初のうちは、死にゆく者の憂鬱な歌が我々に慰めと勇気を与えうるといふ事が分からなかった。我々が彼の死の犠牲を理解するまでは。我々がグローデクのヴィジョンの中に苦しみへと至る秩序を認めるまでは。その秩序は我々にとって死の克服であり、生への信仰告白であると思われたのだ。<sup>33</sup>

これは、詩を寄稿しているハンス・ハインツ・ハーンル (Hans Heinz Hahn 1923-2006)、ヘルマン・フリードル (Hermann Friedl 1920-1988)、オスカー・ザントナー (Oskar Sandner 1927-) らが、どのようにトラークルを読んだのかを示す一節だ。冒頭に引用したナードラーら第三帝国のイデオログが依拠した「民族生物学的文芸研究」とは異なる「作品内在解釈 (Werkimnente Interpretation)」である。それを表すのが「グローデクのヴィジョン (Vision von Grodek)」という言葉だ。「グローデク」はかつてのハプスブルク帝国領東ガリチアにある現実の場所であり、その名を冠したトラークルの詩である。しかしここで用いられた「ヴィジョン」という言葉は、トラークルが第一次世界大戦の戦場の様子を超えて、自ら犠牲になること (Ausgeliefert sein) でキリスト教的世界観を啓示したという解釈に従っており、この考え方は『ブレンナー』がトラークルの死後一貫して強調してきたものだ。それゆえ「信仰告白」はブレンナー派のトラークル理解に、とりわけカトリック期ブレンナーのイグナーツ・ツァンゲルレ (Ignaz Zangerle 1905-1987) が書いた論文「詩人の使命 (Die Bestimmung des Dichters)」に従っている。<sup>34</sup>

当時 20 代だった三人の若者の詩を見ると、ハーンルとフリードルが三篇、ザントナーが一篇を寄せており、合計で七篇である。七という数字はフィッカーが編集を依頼したカール・レック (Karl Röck 1883-1954) による全集『文芸作品 (Die Dichtungen)』のコンセプトであった。<sup>35</sup> バジルはブレンナーのトラークル理解を知悉しており、意図的にそれを踏襲したと思われる。

ハーンルの「エゴン・シーレの思い出に (In memoriam Egon Schiele)」



の第一詩連は以下のようなものである。

雑草が私の垣のまわりに生えた。  
すべての扉が壊されている。  
ただやつれた女たちだけが  
果実を見ようとやってくる、  
枝でもう腐臭を発している。<sup>36</sup>

五行一詩連が三連続く。各詩行のリズムは四揚格のトロフェーウス XxXxXxX(x) であり、不規則ながら脚韻を踏んでいる。この詩形式だけでもトラークルの詩、例えば「美しい街 (die schöne Stadt)」を思い出させる。<sup>37</sup> また「雑草」、「壊れた扉」、「やつれた女」といった言葉が喚起するイメージ、および第三行から第五行の「腐った果実」へと至るアンチクライマックスの技法もトラークル風である。

自由韻律で書かれたフリードルの「詩三篇 (Drei Gedichte)」<sup>38</sup> は、「月 (Mond)」、「孤独な者 (Ein Einsamer)」、「暗い (dunkel)」、「没落 (Untergang)」、「静かな (stille)」、「死 (Tod)」、「狂気 (Wahnsinn)」、「青年 (Jüngling)」といったトラークルが繰り返し用いた語によって一貫している。

ザントナーの「垣の娘 (Das Mädchen am Zaun)」はハーニルの詩と同じく四揚格のトロフェーウスと、aabccbbadd と交差しつつ続く脚韻から一読してすぐにトラークルの「ロンデル (Rondel)」を思い起こさせるものだ。

垣の娘

夕べの影はより長くなる —  
腹を空かせて狂ったネズミが鳴く、  
かすめてゆく 暗い下水溝を通して。

耳を劈くように鳴るサイレン、  
疲れた人間の苦業が終わる、  
貧しく陰鬱に追放された。  
やつれた裸の体を、  
ぼろぼろに朽ちた垣の柵に隠す  
重々しく 怖れに憑かれた娘が、  
憧れのうちに見つめる 垣根越しに。<sup>39</sup>

第二行から第三行にかけての「腹を空かせて狂ったネズミが鳴く / かすめてゆく 暗い下水溝を通して (hungrig pfeifen tolle Ratten, / huschen durch die dunklen Gossen)」はトラークルの詩「ネズミたち (Die Ratten)」の「そこでネズミたちが静かに現れて / そこここを鳴きながらかすめてゆく (Da tauchen leise die Ratten / Und huschen pfeifend hier und dort)」<sup>40</sup>と非常に似ている。また夢をみる「貧しい娘」の像は、詩「若い女中 (Die junge Magd)」や「ソーニャ (Sonja)」でトラークルが一貫して取り組んできた人間の型である。この詩でもって「ゲオルク・トラークルの後継者たち」は終わるのだが、ザントナーが最後に置いた言葉「垣 (Zaun)」は冒頭のハーネルの詩の第一行にも見られる。この企画自体が「垣」で始まり「垣」に終わるように設計されており、これは先に言及したレックの方法論に通ずるものであると同時にレックが意識したであろうリルケがトラークルの詩行を評した言葉「限りない無言をめぐるいくつかの垣 (ein paar Einfriedigungen um das grenzenlos Wortlose)」<sup>41</sup>にも応えるものである。

#### 4. 結語

第二次世界大戦から戦後へと大きく歴史が動いた 1940 年代に「トラークル」という像に投影されたものはあまりにも多様であり、その全体をつかむことは容易ではない。しかし、ツェラン、アイヒンガー、フ

リートといたたいずれもユダヤ系の戦後ドイツ語抒情詩人がトラークルに取り組んだことは注目されねばならない。亡命先のロンドンで作家活動を展開した左翼詩人フリートは1980年代になってトラークルについての詩を書いた。<sup>42</sup> オーストリア人の父とユダヤ人の母をもつアイヒンガーは生涯にわたってトラークルを主題とした。<sup>43</sup> ツェランは創作の初期にトラークルを研究していたことが知られている。<sup>44</sup> すでに述べたように、この三人はいずれもバジルの『プラーン』に最初の作品発表の機会を持った。そして戦後にトラークルが広く再評価される中でバジルは作品を再掲載するのではなく、その「生産的受容」を企図したことは上に見てきた通りである。それを可能にしたのが、ナチズムによる「民族生物学的文芸研究」に対してブレンナー・グループが打ち出した「宗教詩人」としてのトラークル理解であった。戦場で犠牲になった詩人が詩の解釈を通して「復活 (Auferstehung)」し、そのヴィジョンが受け継がれるという思想は、方法論として作品内在解釈を前提としたため、結果的に「宗教詩人」の枠組みを超えてる解釈を許すこととなった。その意味において、フィッカーが罵ったシュネディッツのトラークル解釈もまたブレンナー・グループの努力の副産物であったといえよう。かつて国土と文芸が結びつけられたように、国土と同じく文芸も戦争によって荒廃したならば、「作品内在解釈」はドイツ語文芸を戦後に延命させる一つの必然的な選択肢であった。すると、ドイツ語を母語とするユダヤ系詩人がその創作の初期にトラークルを研究したのは、戦後にドイツ語で詩作するための要請であったという見方もできる。こうして作品内在解釈は戦後抒情詩から現代詩への橋渡しを可能としたが、詩を救済すると同時に、歴史的時間の超越を志向するベンの独我論やナチズムに深く関わったハイデガーの言説をも再生可能とした。

本稿は平成29年度成城大学特別研究助成「戦後オーストリア文学と雑誌文化—オットー・バジルの『プラーン』を中心に」の研究成果である。

注

- 1 Josef Nadler: Literaturgeschichte des Deutschen Volkes. Dichtung und Schrifttum der deutschen Stämme und Landschaften. Bd. 4. Reich (1914-1940). Berlin 1941, S. 456.
- 2 Georg Trakl an Erhard Buschbeck in Wien (Salzburg, Ende Jänner 1912). In: Georg Trakl: Sämtliche Werke und Briefwechsel. Innsbrucker Ausgabe [以下 IA と略す] . Bd. V.1. Briefwechsel. Hg. Eberhard Saueremann. Frankfurt/M./ Basel 2014, S. 179; Georg Trakl an Erhard Buschbeck in Wien (Innsbruck, April 1912). In: IA. Bd. V.1, S. 196.
- 3 Nadler: a. a. O., S. 457.
- 4 Eberhard Saueremann: Die Rezeption Georg Trakls in Zeiten der Diktatur. Stigmatisierung, Instrumentalisierung und Anerkennung in NS-Zeit und DDR. Edition Brenner-Forum Bd. 12. Innsbruck 2016, S. 26. トラークルは多くのユダヤ系作家と深い交流があった。
- 5 Ebd.
- 6 トラークルにおけるヘルダーリンの影響については以下の拙論を参照されたい。日名淳裕：トラークルの詩「ヘルダーリン」について [『トラークル研究』第 14 号 2017 年 23-32 頁]。
- 7 Saueremann: a. a. O., S. 28.
- 8 しかし、自らが経営するブレンナー出版 (Brenner-Verlag) の存続を目的としてフィッカーも帝国文学院に入会申請をしている。Anton Unterkircher: Der „Brenner“ (1910-1954). Eine Chronologie. In: Zeitmesser 100 Jahre „Brenner“. Hg. Forschungsinstitut Brenner-Archiv der Universität Innsbruck. Innsbruck 2010, S. 227-269, hier S. 262ff. ただこれは従来ドイツに依存していたオーストリアの文学出版業界の特殊事情が背景に指摘されるため、フィッカーがナチズムに賛同したことを示すものではない。第一共和政から合邦を経て帝国文学院による文学の統制へと至る経緯については以下の論文が詳しい。Murray G. Hall: Publishers and Institutions in Austria. 1918-1945. In: Katrin Kohl and Ritchie Robertson (Hg.): A History of Austrian Literature 1918-2000. New York 2006, S. 75-86.
- 9 Rüdiger Wischenbart: Literarischer Wiederaufbau in Österreich 1945-1949. Am Beispiel von sieben literarischen und kulturpolitischen Zeitschriften. Königstein/Ts. 1983, S. 10ff.
- 10 表現主義抒情詩の集成『人類の黄昏 (Menschheitsdämmerung)』の序文で編者のピントゥスはこの書が共通のテーマを持ち、何らかの基準にしたがって個々の作品を配した (vertikal) 「アンソロジー」ではなく、雑多なテーマの詩が「地平線的に」、「同時に (simultan)」集められた「集成 (Sammlung)」であり、「交響曲 (Symphonie)」であると述べている。Kurt Pinthus: Zuvor (Berlin, Herbst 1919). In: Ders. (Hg.): Menschheitsdämmerung. Ein Dokument des Expressionismus. Hamburg 2016, S. 22-32, hier S. 22f.
- 11 このアンソロジーについては以下の拙論を参照されたい。日名淳裕：「偉大な過去を誇りに、切断された祖国への信仰を表する」オットー・バジルの詩集『天秤座』におけるオーストリアの詩的再建 [教養論集 (成城大学法学会) 27 号 2017 年 87-101 頁]。

- 12 戦後オーストリア文学における「祖国」については以下の拙論を参照されたい。日名淳裕：訪れない「戦後」——L. W. ロホヴァンスキーによるオーストリア文学再編の試み [「人殺しと気狂いたち」の饗宴あるいは戦後オーストリア文学の深層 日本独文学会研究叢書 126 2017年 57-71 頁]。
- 13 『ブラーン』、『トゥルム』、『喜劇』、『アガトン年鑑』、ヘルマン・ハーケル (Hermann Hakel 1911-1987) の『リュンコイス (Lynkeus)』のいずれにもグリルパルツァーが象徴的な形で掲載されている。
- 14 Der Turm. Monatsschrift für österreichische Kultur. Hg. v. der österreichischen Kulturvereinigung. (Jg. 2, Nr. Zur Jahreswende 1947/48 –Sonderheft), S. 443.
- 15 Agathon. Almanach auf das Jahr 1946 des zwanzigsten Jahrhunderts, S. 82-84.
- 16 Komödie. Zeitschrift für Künstlerisches Theater. Geleitet v. Benno Fleischmann. (H. 2, September 1946, 1. Jahr), S. 55.
- 17 das silberboot. Zeitschrift für Literatur. Hg. v. Ernst Schönwiese. (3. Jg/ 1947 H. 1), S. 51.
- 18 Georg Trakl: Nachlass und Biographie. Gedichte, Briefe, Bilder, Essays. Hg. Wolfgang Schneditz. Salzburg 1949.
- 19 Wolfgang Schneditz: Georg Trakl als Dramatiker. In: Komödie. (11/12 1946 1. Jahr), S. 166-170.
- 20 Ludwig von Ficker: Das Vermächtnis von Georg Trakl. In: Ders.: Denkkzettel und Danksagungen. Aufsätze und Reden. München 1967, S. 222-255, hier S. 235.
- 21 Ebd., S. 222.
- 22 Ebd., S. 223.
- 23 Ebd.
- 24 Ebd., S. 235.
- 25 Martin Heidegger: Georg Trakl. Eine Erörterung seines Gedichts. In: Merkur. Deutsche Zeitschrift für europäisches Denken (7. Jg., H. 1. 1953), S. 226-258.
- 26 『トゥルム』は多くの詩作品を掲載したが、マックス・メル (Max Mell 1882-1971)、ルドルフ・ヘンツ、フェリックス・ブラウン (Felix Braun 1885-1973) ら旧世代のものが大半であった。第一期第 11 冊に「若者の詩 (Gedichte der Jungen)」という題の連載が始まるが、第二期第 2 号で終わっている。
- 27 Erich Fried: Zwei Gedichte. In: Otto Basil (Hg.): Plan (1. Jahr/ 1946/ 6. Heft) Vaduz/ Liechtenstein 1979, S. 457-458; Friederike Mayröcker: An meinem Morgenfenster. In: Plan (1. Jahr / 1947 / 10. Heft), S. 802.
- 28 Ilse Aichinger: Aufruf zum Misstrauen. In: Plan (1. Jahr/ Juli 1946 / 7. Heft), S. 588; Paul Celan: Der Sand aus den Urnen (17 Gedichte). In: Plan (2. Folge/ 1948/ Nr. 6), S. 363-369.
- 29 Volker Kaukoreit, Wendelin Schmidt-Dengler: Vorwort. In: Profile. Magazin des österreichischen Literaturarchivs (2/1998). Otto Basil und die Literatur um 1945. Wien 1998, S. 5.
- 30 『ブラーン』の成立背景については以下の拙論を参照されたい。日名淳裕：戦後ドイツ語抒情詩の出發「ブラーン」とトラークルを手がかりとして [現代詩手帖 2017 年 11 月号 86-89 頁]。
- 31 Plan (1. Jahr/ Juli 1946 / 7. Heft), S. 531.

- 32 バジルはフィッカーと 1945 年に知り合っている。Anton Unterkircher: Ludwig von Ficker. In: Zeitmesser 100 Jahre „Brenner“, S. 31-55, hier S. 53.
- 33 Bekenntnis zu Georg Trakl. In: Plan (1. Jahr/ Juli 1946 / 7. Heft), S. 554.
- 34 Atsuhiko Hina: Zur Rezeption Georg Trakls nach dem Zweiten Weltkrieg. Produktive Rezeption, Intertextualität, Strukturanalogie, Fortschreiben. (Diss.) Universität Wien 2014, S. 41ff.
- 35 Vgl. Karl Röck: Über die Anordnung von Georg Trakls „Die Dichtungen“. In: Erinnerung an Georg Trakl. Zeugnisse und Briefe. Salzburg 1959, S. 225-249.
- 36 Hans Heinz Hahn: In memoriam Egon Schiele. In: Plan (1. Jahr/ Juli 1946 / 7. Heft), S. 555.
- 37 「美しい街」は四行一詩連である。
- 38 Hermann Friedl: Drei Gedichte. In: Plan (1. Jahr/ Juli 1946 / 7. Heft), S. 556f.
- 39 Oskar Sandner: Das Mädchen am Zaun. In: Plan (1. Jahr/ Juli 1946 / 7. Heft), S. 557.
- 40 Georg Trakl: Die Ratten. In: IA. Bd. 1, S. 399.
- 41 Rainer Maria Rilke an Ludwig von Ficker (8. Februar 1915). In: Ludwig von Ficker: Briefwechsel 1914-1925. Hg. Ignaz Zangerle, Walter Methlagl, Franz Seyr und Anton Unterkircher. Innsbruck 1988, S. 86f.
- 42 フリートのトラークル受容については以下の拙論を参照されたい。日名淳裕：ザルツブルクの人身御供 —80 年代のエーリヒ・フリートが読むトラークルと戦後オーストリア [ウィーン 1945-1966 —オーストリア文学の「悪霊」たち— 日本独文学会研究叢書 114 2016 年 72-85 頁]。
- 43 アイヒンガーにおけるトラークル受容については以下の拙論を参照されたい。Atsuhiko Hina: „Die heute undurchschaubare Strategie der Liebe“. Zur Trakl-Rezeption bei Ilse Aichinger. In: Neue Beiträge zur Germanistik. (Bd. 13/ H. 1) 2014, S. 147-164.
- 44 Vgl. Christoph Grube: „so oder so, es bleibt blau oder braun, das Gedicht“ Aspekte der Trakl-Rezeption Paul Celans. Würzburg 2013.